

地元の狩人達の力を借りて。右が筆者と孫



「ジジ」の単独猪猟

神奈川県 田宮 治

④ 人は人なり、俺は俺なり

● 我流を買き、俺流の完成

悔しい思いの連続であり、獲れない日が続いた。決してサボっているわけでもなく、やる気がないわけでもない。私が大物猟を始めたのは、それまで出猟していた山梨県の猟場に鳥がめつきり少なくなったのが契機であった。そこで、大阪まで出向き、梅元あゆみさんからベテラン犬の「リオ」号と「トム」号を分けていただいた。

当時のあゆみさんは、まだ少女のようにあどけない子で、「この子が大物猟をするのか？」と思ったが、一緒に行ったファミリーレストランで色々話を聞くと、小さいときからお父さんに付いて猟を覚えたこと、また犬が大好きであること…など、私とダブることが多いので納得し、追跡犬のウツカーと米ビーグル

をもらうことにしたのである。

あゆみさんは、二頭の犬を私の軽トラックに積み、大物猟について堂々と語り、勧めた食事をペロリとたいらげ、「ありがとう」とペコリと頭を下げて帰って行った。その彼女とは、今もって何頭かの犬をもらったり、またこちらからあげたりしている…そんな間柄である。彼女から譲り受けた犬達は、実に利口で申し分のない犬であった。

私は、誰に教わるわけでもなく、小さい頃から覚えたあのウサギの「猟法」を引つ下げ、飽きも懲りもせずに、「なあに、シカ猟なんてウサギ猟と同じさ」と、暇さえあれば犬達を連れて、せっせと山行きを決め込んだ。

犬達は、毎回のようシカを追い出したが、イノシシはほとんど出さなかった。山では、決まって峠近くで放犬した。追い鳴きが始まると、私は車で今来た道を一目散に下り、いつもの渡り場で待ち受ける…といった、今考えれば「バカだね。そんなことで獲れるわけがない」である。車で三〇分も登る、高い山並みが続く山梨県の南アルプスが

獵場だったので、いくら急いで走って渡りに行っても、シカはせせら笑うかのように、今渡った濡れ跡を石に残して谷川を渡ってしまっている。

「また逃げられてしまったか」と、へなへなと座り込んで汗を拭いていると、鳴きながら近づいて来た犬達が「オヤジよ、今大きなシカが来ただろう」と、そんな顔で私を見上げています。逃がしても逃げられても、反省もせずに黙々と追い犬を使つての単独獵であつた。

それでも、シカではあつたが、一獵期に二、三頭は犬達のおかげで獲らせてもらい、満足はしていたのである。

当然のことであるが、追い犬での単独獵では、近くで起こし、谷を越えて山に登るとき、または横切るとき、ほんのわずかな一瞬がシカを倒せるチャンスである。それ以外は、必ず私から遠ざかってしまう。

ウサギと異なり、シカは逃走範囲が桁外れに広く、回つて来るのに時間がかかる。当時、いくら私が足が速いと言つても、ひと山も二山も越えて追いかけることなど到底できるものでは

なかつた。しかし、わかつていても変えられないのがこの気性である。あつと言う間に歳月が流れ、犬種も替えて追い犬はブルーチックになつていた。

ある日、三頭を連れて山梨県の十牧山での出来事である。「月夜の段」という峠で放犬すると、すぐに鳴き出した。三頭は、いつものコースを下へ下へと下つていくようだが、どこかいつもとは様子が違う。止まつては大声で吠え立て、また走つては止まるのである。

「変だなあ」と、車でゆつくりと後をつけると、すぐ下の沢に降りたようで、鳴き声が動かなくなつた。おかしい、何だろ？ 近づくとつれて追い鳴きではなくなつていた。

クマかも知れない。三頭の犬のうち二頭は、クマにも行く「アニー」号である。木に上げたのかも知れないと、大杉が四、五本混じつている雑木の大きな木を一本一本探しながら谷川に出た。犬達の声のほうを見ると、谷川のすぐ横の大岩とツバキと笹に被われた所で、上に「パロン」、下に「アニー」と「メリー」が何かに吠え込んでいる。

銃を握りしめ、ソロリソロリと近づくと、何も見えない。さらに近づくと、「アニー」が奥に吠え込んだ。突然、岩が動いた。「シシだ」と、夢中でイノシシを突き刺すように一発を撃つた。イノシシは、目の前の河原に飛び出して動かなくなつた。

銃声が散つていた犬も集まつて来て咬みついた。いや、驚いた。七〇〜八〇kgのイノシシであつたが、あまりの嬉しさに銃を突き上げ、バンザイをして抱きしめて「よくやつた」と、頭を撫でてやつた。

しばらくして、ようやく興奮が覚めると同時に、実感がこみ上げてきた。シカかクマか？ と近寄つたときに姿が見えず、もしかしたらタヌキかも？ と思つたのに、まことに呆気ないイノシシの初獲りであつた。

しかし、それよりも大きな収獲は、「イノシシでもシカでも、犬が止めなければ獲れない」と悟つたことであつた。「そうだ、止め犬を育てよう」と、心に決めたのだつた。この頃を境に、四国犬、ラガー、島犬と、良いと聞けばどこまでも出かけ、

子犬を抱いて帰つた。

そして、その子犬を「アニー」に付け、人に何を言われようとも、何度失敗を繰り返そうとも全く意に介さず、ただ「明日こそは、明日こそ」の思いで、犬を山に引き入れ、その後を追つた。いつしか、この山でイノシシが入っているとしたら、あそこ以外にない。あの尾根から犬を掛ければ、ここで止まる：と、次第に予測が的中するようになり、それにしたがつて、獵果も挙がつていった。

犬達も咬むたびに、目を見張るほどの獵芸を身につけていった。おぼろげにも、犬の訓練の「極意」のようなものがわかつてきた気がした。決して大袈裟なことではない。「止めたら獲つてやる」、そして犬達を思い切り「褒めてやる」：たつたこれだけのことである。

本誌でも毎月、色々な犬種、色々な獵法が紹介されているが、すべてに手を出すのではなく、自分に合った犬種や獵法を選んで、それらをひたすら磨くことである。失敗を恐れず、一心に自分の狩獵技術を鍛え上げれば、やがて先達の言われることも理



咬み止め犬の奈智号と竜君、ボス号

の実力となり、ひいては自信になるのである。
狩猟家の皆さん、どうか自分に合う猟法で愛犬群を育て、良い猟友とともに安全で楽しい猟を一日でも長く続けられるよう祈っています。

●来る猟期に向けての猪犬作りと猟友づくり

私には、大きなことを述べる資格は何もない。あるとすれば、人に負けない気力と、数多くの失敗と体験である。それゆえ、勇気を出して本誌への投稿を決意した次第である。

愛犬が止め、自力で刺す、または撃ち獲る。そんな一連の猟芸ができるように育つたとき、紹介される先達の言葉のすべてを理解できるようになる。
当たり前のことだが、同じレベル、同じ目線でモノを見ないと、物事の真意などわからないのである。山に出て犬を引き、自ら体験する。この失敗を恐れない体験こそが、狩人の狩猟技術を高め、犬群の猟芸を完成させるのであって、近道などあるはずがない。平凡なことだが、日々の努力の積み重ねこそが、押しも押されもしない自分の真

「狩猟界」は、大物猟の教本とも言うべき雑誌である。大物猟の技術体得への近道は、本誌を熟読され、必要な知識を得ることだと思う。ただ読むだけでは何年かすれば、例えば素人の狩人でもプロになれるだろう。ただこの場合でも、決して失敗を恐れず、知識として得たことを素直に行動に移し、経験を重ねることによって、確実に自分のものにできるかどうかのポイントになるであろう。

「犬作り」についての基本は、名の知られた(優秀な)狩人(で

きれば単独猟をされている方)から、自分に合いそうな子犬を譲り受けることである。間違っても、単独猟に「追跡犬」など選ぶべきではない。追跡犬は、グループ猟向きの犬である。当然のことだが、かつて私もこれで失敗した。

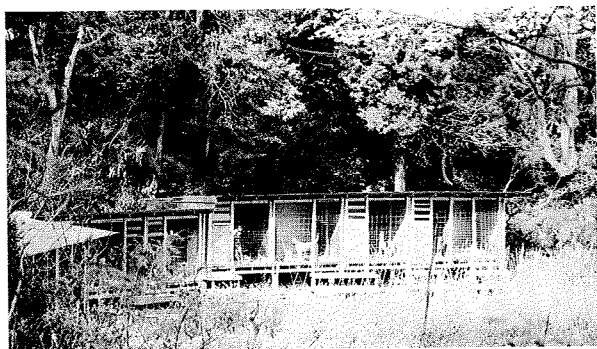
昔から「茄子の蔓には茄子しか成らない」の諺がある。長年犬の交配を行ってきたが、実的を得た言葉だと思っている。「トンビがタカを…」狙ったの交配も、やはり上手くはいかなかった。

交配の一番のポイントは、山に引き、自分の目で確認した「よくやる犬」と「よくやる犬」の組み合わせで、ここから生まれた子犬は、やがてタカとなる犬で、山に引けば必ず宝犬となると確信する。

そして優秀な猟犬を育てる近道は、最高の芸を持つ老犬に二〜三頭の子犬(老犬が牡なら牝の子犬を二頭)を付けて、ひたすら山に引くことである。決して怒らず、焦らず、ただただ引くことである。

このときに大切なことは、犬を褒めてやることで、子犬が何

か良いことをしたときには、日光猿軍団よろしく、オヤツをあげて頭を撫でてあげることである。そうすれば、たぶんその猟期に小さなイノシシくらいは獲れるようになるのではと思う。
色々なこと：高いレベルの犬種の取得、狩人の高度な技術、目を見張る猪犬の止め芸：などは、初めから得られたり身に付くものではない。究極の猟芸などは、一生かかっても達成できないものではなく、むしろ、それを目指求めることが「狩人とし



大舎全景

での「楽しみ」であると考えるべきである。

「おたくは犬が良いから、一人でも獲れる」と言われる方がいるが、「一人でも獲れる」というその裏側を見てほしいし、考えてほしい。よく獲る狩人は、来る猟期に向けて人知れず努力をしているものである。

早い話、三〇頭の犬を養うという事は、半日は犬舎の掃除や食餌の世話でつぶれる。それらを汗まみれ、糞まみれで黙々と行っているのである。そうした努力を重ねて育てても、一つ間違えば「タカ」のような犬ができることはなくなってしまう。そうなる、「やつてられないヨ」であるが、それでも懲りずに作った犬を山に引いて、汗まみれで夏の虫に刺されながら苦勞を続けているのである。しかし、そんな苦勞も、猟期になつて一頭のイノシシを撃ち獲らせてくれることで、一気に吹き飛んでしまう。

考えてみると、実に子供じみているが、それでも私は、こうした猪犬作りとその保存に残りの人生をかけたかと思つている。どんな名言を連ねても、単独

猟では、例え一頭のイノシシでも、犬がつちり止めなければ、撃ち獲れるものではない。さらに、ただ「獲れる」ことだけを目的とするなら、強い犬を作ればよいわけだが、安全で他犬や他人に害を与えない犬、使いやすい犬、一人でも獲れる犬を作らなければならぬところに苦勞があるのである。

単独猟における猪犬の条件は、当然のことながら、まず止めることができる犬であることが挙げられる。鼻が良く、素早く寝て鳴き止めていること。イノシシが飛び出したなら、すかさず咬み下り、引きずられながらも全犬で絡んで谷落とすること。そして止めたなら、役割が決まっているかのように両耳に行く犬、後足に行く犬と、犬の大小に關係なく、猛然と襲う気力と俊敏な絡みでイノシシと渡り合う力を兼ね備えていれば、大猪でも逃げ道に乗せることなく、長時間止めていて撃ち獲らせてくれる最高の猪犬である。

しかし、まことにもつて「言うは易し、作るは難し」である。猪犬の猟芸のうちで、特に曲者

は「鳴き声」である。よく観察すると、小さい犬が大猪を止めるときと、また寝屋でよく止める犬とは、鳴き声にひと味異なるものを感じるはずである。このような犬は、一頭でも止めるし、あまりケガもしない。

こうした犬は、俊敏な絡みが身上で、その絶妙な攻撃力は時に厳しく、頭の良さと注意力を發揮する。このことが大切な要件の一つであり、作るのに最も難しい項目であると思つている。

しかし、このような犬でなければ決してイノシシは獲れないと思つているので、その作出に全力で取り組んでいる。

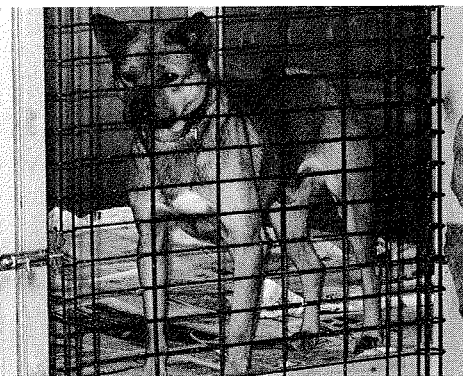
犬達の使用は、単犬でもよいと思うが、できれば自分の実力に合わせて、私のような老体は五〜六頭、若い実力者は三頭くらいでよいと思う。ただこの場合、犬の命にかかわることなので、決して格好をつけたりせずに、思つた頭数より一頭増やすくらいがよいと思う。そうすれば、犬達のケガも少なく、また早く止めることができる。

紀州の名犬でもないかぎり、ゆめゆめ一頭引きはやめたほうがよいと思う。山では、どんな

イノシシが出るかもわからない。一頭では、それだけケガをする確率も多くなってくる。万が一、愛犬が命でも落としたりしたら、せっかくの猟が楽しくも嬉しくもなくなってしまう。

止めた大猪の突進と、牙を鳴らしての攻撃を間近で見たことのある狩人なら、三頭以上掛けたらどうかという私の気持ちがあわかつていただけだと思う。

単独猟や二〜三人での猟は、何と言つても「犬」であり、その育て方、使い方が最も大切であると考えているので、具体的



「ケン」号。来る猟期が楽しみな二歳

に私見を述べてみた。

●地元ハンターとの交流

次に、地元の狩人と仲良くして共猟できるように心がけたい。私が住んでいる所には猪山はない。それゆえ、地方の猟場に向いて行くのだが、そこで地元の方にお世話になることが多い。獲ることに食欲にならない。子猪、牝ジカは獲らない：そんな心ある狩人でいたいと思う。

そのために、私は「関東猪犬猟山彦会」を設立した。「根っからの単独猟師がなぜ？」と思われながらも知れないが、まず犬の保存があった。そして、猪犬の芸と猪犬の醍醐味を一人でも多くの方に味わっていただきたいことと、狩人が皆仲良く猟ができるようにと考えたからである。

今の世の中、どこかが狂っている。毎日の新聞やテレビのニュースで伝えられるのは、実に意外なことが多い。教育から「修身」が消え、親の恩や義理・人情、物事の道理などは、遠い昔に追いやられてしまった。

こうした世の中になってしまったのは、自分の考えと目標をしっかりと持つことができない、

物事の善悪の区別もつけられない人が増えたためと思う。思い返せば、あの悪ガキ(私)が、あの何もない時代を何事もなく乗り越えられたのは、自然の中で狩猟を覚え、没頭できたからであらう。

人間、一生を通じて生きる糧となる趣味を持つことも大切である。私は、常々「狩猟が趣味」と言うからには、その趣味が一級品でなくてはならないと思っている。なぜなら狩猟には、かけがえのない命がかかっている



左より：「イチ」号、「ミス」号、「クロ」号

からである。

ご存じのとおり、狩猟の世界も老人クラブ化してきている。この現実を謙虚に受け止め、狩猟者皆が働きかけて、若者の目を狩猟に向けさせる必要がある。人間は、自然の流れの中に生きるのが一番で、自然の流れには勝てないものである。

「狩猟」は、苦労ばかりでつまらない：から若者が集まらないのではないかと思う。ここが問題であり、猟友会も支部・本部を問わず、役員は「どうしたら、狩猟人口が増えるのか」をもっと掘り下げて考える必要があるだろう。厳しさの中にも楽しい狩猟、面白い狩猟を、若者達が自然に集まってくるようであれば、狩猟の未来は開けてこない。

「狩猟って、楽しいものなんだ」と思えるような、そんなクラブがあったら：と考えると、私は前記のクラブを設立した。そしていつの日か、愛犬家が猪犬を引き連れ山に行き、楽しいから皆が集まってくる場所：山里に山荘を作り、遊びの輪を広げていきたいと、夢のようなことを考えている昨今である。

狩猟の楽しさを若者達に伝えられたいと思っている



全国の狩猟家の皆さん、元気で楽しく、一日でも長く猟野を駆けようではありませんか。そして、関東地方の狩人の皆さん、小学一年生の女の子を連れた「ジジ」と「パパ」の風変わりなハンターを見かけたら、ぜひ声をかけてください。

最後に、私に良い犬達を授けてくださった全国の先達に心より感謝申し上げます。

(二部へつづく)